

坂本 薫 提出 学位申請論文

『神奈川県方言アクセントの記述的研究』 審査報告

論文の内容の要旨

本論文は、神奈川県方言アクセントの記述的研究である。

神奈川県方言は隣接する東京のアクセントと類似すると考えられ、全県を対象とした詳細なアクセント研究の発表は多くなかった。本研究では、神奈川県の高年層のアクセントの調査を行い、伝統的神奈川県方言のアクセントの体系を記述する。それによって、神奈川県内方言の体系の特徴を明らかにし、県内における地域差を明らかにし、当該方言が東京方言の古層を残す点と、新しく変化した点を明らかにすることを目的とする。

まず、地点と方言区画についてまとめる。

神奈川県は、関東地方西南部に位置し、北は東京都、西は山梨県、静岡県と接している。旧国名で言うと相模国全域と、武蔵国の一部を含む。方言学的には、関東方言の下位区分である「西関東方言」に属する。神奈川県の本格的な方言研究は、日野資純氏による研究から始まった。氏はまず方言区画を明らかにするために、全県で、音韻、アクセント、文法、語彙の調査を行った。その結果から、県内の次のような方言区画が提案された。まず、県北西部に位置する丹沢山塊を境に県内方言は「神奈川県北部方言」と、「神奈川県南部方言」に分けられる。「南部方言」は、

県中央部を流れる相模川を境に東西に分類され、相模川以西は、西から「足柄方言」と「愛甲南部＝中郡方言」に分けられる。相模川以東は、相模川東岸に位置する「高座＝戸塚方言」と、県東南部の「三浦半島方言」に分けられる。さらに、県南部の相模湾沿岸地域は県西部から東部にわたり「相模湾沿岸方言」に区画される。これに横浜、川崎を中心とする地域でもっとも東京のことばに近いとされる「東京＝横浜方言」が加わる。氏の方言区画は、おもに語彙や文法の分布によって設定された点に特徴がある。

調査地点の選定は次のように行った。

地点選定は日野資純氏による県内の方言区画によった。「神奈川県方言的」と言われる「南部方言」から小田原市方言（足柄方言）、二宮町方言（愛甲南部＝中郡方言）、寒川方言（高座＝戸塚方言）、三浦市方言（三浦半島方言・相模川沿岸方言）、横須賀市東部方言（東京＝横浜方言）のアクセントを記述した。

調査の概要は次のようである。

臨地調査を行い、各方言区画のなかで特徴のある地点の生え抜きの老年層話者との対面調査によりアクセントを聴取した。調査語例は、『全国アクセント辞典』（平山輝男 1960）所収の「類別語彙表」中心に、その他に多拍語や俚言、固有名詞の語例として調査地点と関わりの深い地名を選んだ。内訳は名詞が 437 語、動詞が 175 語、形容詞が 52 語である。名詞は、語単独のアクセントと、その語に助詞の接続したアクセントを観察した。動詞、形容詞は、終止形のアクセントと、活用形のアクセント

トとして、「た」「ない」「らしい」など、様々な語句が後接した諸形式のアクセントを観察した。

調査の結果、神奈川県アクセントの特徴として次の点が明らかになった。

神奈川県方言のアクセントは、「東京式アクセント」で、 n 拍の語に対して $n+1$ 種のアクセントの型の対立がある。対立する型の数は東京方言と同じであるが、型に所属する語例に出入りがあり、神奈川県内で地域差が観察された。1 拍名詞では、第一類「帆」は、小田原市方言や三浦市方言では伝統的なアクセントである平板型であったが、二宮町方言、寒川方言、横須賀市東部方言では頭高型であった。2 拍名詞について、第二類「北」は横須賀市東部方言以外の地点では尾高型、横須賀市東部方言では平板型であった。第三類「雲」は、三浦市方言で尾高型であり、その他の地点では頭高型であった。3 拍の名詞について、第四類の「扇、林、東」、第五類の「命、涙、枕」は横須賀市東部方言以外の地点では尾高型や中高型であった。また、神奈川県方言特有とされる「カボチャ（南瓜：二宮町方言）」「キノコ（茸：二宮町方言、三浦市方言）」「マミヤ（眉：三浦市方言）」の中高型のアクセントも観察された。4 拍以上の語については、「雷」や「足音」は尾高型アクセントが観察された。また、複合名詞において後部要素のアクセントが生かされる型が観察される。特に、三浦市方言では多く観察された。

このほか、小田原市方言、寒川町方言、三浦市方言で、1 拍平板型の名詞について、「テカ^oタリナイ（手がたりない）」、「メオカケル（目をかける）」と、慣用表現のアクセントにおいて、本来頭高型の語が平

板化するという特徴が観察された。また、県内の要な地名や字名、旧村名、河川名のアクセントを調査した。その結果、「厚木、大山、小田原、江の島」などの主要な地名が尾高型に発音された。小田原市方言では、「ソカ°（曾我）」「エノウラ（江の浦）」などで尾高型が観察され、「スミヤシキ（隅屋敷）」「センドコージ（千度小路）」などでは多拍語の地名に頭高型が観察された。二宮町方言では、「ナメラクボ（滑窪）」「ナカタニヤト（中谷屋戸）」のように多拍語で平板型のアクセントが観察された。これらは当該方言アクセントの特徴である。河川名では小田原市方言では市内を流れる「サカーカ°ー（酒匂川）」は、平板型で発音されるが、生活圏内から離れた「サカ°ミ]カ°ー（相模川）」は起伏型で発音される。一方、相模川流域の寒川町方言では「相模川」は平板型で、「酒匂川」は起伏型で発音される。

次に動詞アクセントの特徴について述べる。終止形のアクセントは基本的には東京方言のアクセントと同じである。しかし、第三類の「ヘール（入る）」だけが例外で、平板型で、寒川町方言と三浦市方言で観察された。三浦市方言では、「ヘーレ（入れ）」「ヘーラセル（入らせる）」など、他の平板型の動詞と同じアクセントであった。寒川町方言では、「ヘーッタ（入った）」「ヘーンノ]カ°（入るのが）」が平板型と同じ活用形のアクセントであった。

活用形のアクセントについては、平板型の動詞に後接する形式に県内での地域差が観察された。例えば、「アソビ]ニイク、アソビ]ニクル（遊びに行く・来る）」のような連用形の尾高型のアクセントが小田原市方言、

二宮町方言で観察された。寒川町方言や三浦市方言でも同様のアクセントが観察されるが、これらの地点では平板型も併用が観察される。横須賀市東部方言では、平板型で発音される。

この他、「イクノ】カ°（行くのが）」「アソブノ】カ°（遊ぶのが）」と、高く平らに続くアクセントが横須賀市東部方言以外の地点で観察された。寒川町方言と三浦市方言には伝聞の「～そうだ」に相当する「トヨー」という形式で、「ウルトヨ】ー（売るそうだ）」のように「と」が高く平らに続く。起伏型の動詞は、三浦市方言の「ヤガレ」が後接した形式で、「カ】キヤカ°レ（書きやがれ）」のように前部要素である動詞に「下がり目」が来る特徴が観察された。

次に、形容詞のアクセントで観察された特徴を挙げる。3拍形容詞の終止形の型の対立について、小田原市方言、二宮町方言、横須賀市東部方言は平板型と中高型の対立が保持されている。寒川町方言と三浦市方言では、中高型への統合が起きている。二宮町方言は「アケ】ー（赤い）」「トエ】ー（遠い）」のように語末の連母音が融合した形式については型の対立が失われる。中高型への統合が起きている地点でも、後接形式によっては「アセーヨ（浅いよ）・タケ】ーヨ（高いよ）」、「アサクネ】ー（浅くない）・タカ】クネー・タ】カクネー（高くない）」のように対立が保たれている。

活用形のアクセントについて、「浅かった」「浅ければ」の形式について、三浦市方言では「アサカ】ッタ」「アサケ】レバ」のように中二高型で発音される。寒川町方言でも「た」後接形式は同様である。起伏型の

形容詞の活用形について「なる」「ない」などが後接した形式は、寒川町方言と三浦市方言では「タカ]クナル・タ]カクナル（高くなる）」と中一高型と頭高型の併用、横須賀市東部方言では頭高型で発音されるが、小田原市方言と二宮町方言では、「タカクナル（高くなる）」と中三高型のアクセントも観察された。

今回は詳しく触れられなかったが、音声的特徴として規則的な連母音の融合があげられる。中井町方言では、「コウエー（怖い）」「オメー（重い）」「ヒキー（低い）」などの形容詞語末だけでなく「エーテ（相手）」「ニエー（匂い）」「オームケ（仰向け）」などの名詞や、「カンケール（考える）」や「エーバ（会えば）」「ヤビータ（破いた）」など動詞の語幹や活用形の中にある連母音でも融合が観察された。

本研究のまとめとして次のことがいえる。

神奈川県方言アクセントは、基本的には東京方言アクセントと同じ型の対立を示す体系である。型の対立のあり方は東京方言と同じであるが、型に所属する語に出入りがある。

神奈川県内では横浜市のように幕末から明治以降急速に発展して地域と人口増加の激しい地点と、それ以外の地域では伝統的アクセントの保持の程度に差がある。横浜市などでは首都圏方言のアクセントが行われ、それ以外の旧相模国の地域では比較的安定的な言語集団を保持し伝統方言アクセントがまだ残されている。本研究で、それぞれの地域方言に地域差があることが明らかになった。伝統的な地域方言の担い手は高齢化し、伝統的な県内方言アクセントの様相を知ることが困難になっていく

のは明白であるから、高年層の調査が急がれる。神奈川県方言アクセントは首都圏方言や共通語の基盤をなす関東方言の基盤を明らかにするために重要である。そのためにも、県内方言のさらなる詳細な実態記述が急がれる。また、県内で生育した若年世代のアクセントの実態を明らかにすることも課題である。山梨県に隣接する県北部の調査も急ぎたい。

論文審査の結果の要旨

本論文は、神奈川県方言アクセントの伝統的な体系を記述し、神奈川県内におけるアクセントの実態と地域差を明らかにすることを目的とした研究である。

神奈川県方言は、東京都心との交流も密で、都に接続する京浜工業地帯と東京圏への通勤通学する人が多いため、横浜市方言や鎌倉市などが注目され、関東方言の一部としての位置づけがなされてきた。そのため、文法や語彙については優れた研究があるが、アクセントについては、東京式アクセントに属するアクセント体系で、東京式アクセントと同じ $n + 1$ (拍数 = n) であり、県全体に関する詳しい実態の発表はほとんどなされてこなかった。

これまで神奈川県全域については、語彙・文法の項目以外の発表は多くなかった。本研究では、神奈川県内のアクセントは対立する型の相も数も県内全域で東京方言と同じであるが、型に所属する語例に出入りがあり、それらに神奈川県内で地域差があることを指摘した。この点は優

れている。アクセントの体系的研究の少なかった横浜市を含む神奈川県全域の伝統的方言の相の記述は、関東方言におけるアクセントを解明する上で、価値のある論文となっている。

神奈川県方言研究が隣接する東京との密接な関係が注目されるあまり、神奈川県方言全域のアクセントの特徴が明らかにされていないことを先行研究をもとにまとめる。そして、特に旧相模国に当たる地域では、現在でも安定性を持った言語集団が保持されており、そこでは東京方言の基盤となった伝統的関東方が行われていることを指摘する。このような伝統的な方言を使用する世代は高齢化しているため、早急な調査が必要であることを主張する。関東方言各地では、神奈川県のみならず、第二次世界大戦以前に言語形成期を終えた伝統方言を保持する高年層話者が健在で、伝統的方言を記述できる最後の時期であることから、この指摘は適切である。

続いて「神奈川県方言」の話される地域である神奈川県の概要、神奈川県方言研究史を概観し、本研究の研究方針と基礎的な概念、調査方法について述べる。

本論文の基礎となる方言区画は日野資純氏の分類区画により、それをもとに調査地点を選定している。神奈川県方言は丹沢山塊を境とする「北部方言」と「南部方言」に大別される。「南部方言」は、県中央を流れる相模川によって「相模川西部方言」と「相模川東部方言」に分けられ、「相模川西部方言」には「足柄方言」と「愛甲南部＝中郡方言」が、「相模川東部方言」には「高座＝戸塚方言」と「三浦半島方言」が含まれ

る。さらに、県南部沿岸は「相模湾沿岸方言」として分けられる。また、旧武蔵国に当たる地域を中心とする、「東京＝横浜方言」がこれに加わる。

話者は、当該地点で言語形成期を過ぎた高年層話者を対象にして、面接聞き取り調査を行ってゐる。

アクセント体系の解釈は、高から低への下降が弁別的特徴であり、本論文ではそれを「下がり目」とする。調査項目は、平山（1960）所載「類別語彙表」アクセント調査項目を中心に1拍～4拍の調査語例と、俚言である。内訳は名詞が437語、動詞が175語、形容詞が52語である。地点により5拍以上の語や地名、複合動詞の項目も追加している。

アクセントは、名詞は語単独とその後助詞の接続したアクセント節、動詞は終止形の他に、連体形、命令形、否定形、「～た」や、「～たい」等の後接形式が接続する形式、形容詞は終止形の他に、「連体形＋こと」や、「～かった」、「～くなる」、「～ない」などの形式を調査している。

体言のアクセント記述が中心であった神奈川方言において、動詞と形容詞の活用形のアクセントの丁寧な記述は今までに報告がほとんどなく、この点が本研究で優れている点である。ただ活用形と後接形式の整理が十分でないため、アクセント記述がわかりにくくなっている点が惜しまれる。

以下、神奈川方言アクセントの特徴を示す。神奈川県内全体では東京方言と同じ $n + 1$ の型の対立の数と東京方言と同じ型の相であるが、型に所属する語が語的に東京式アクセントとは異なる。それらの例外となる語について県内の差と、神奈川方言としての特徴について述べる。

3拍名詞において、「朝日、油、小麦、栄螺、姿…」と中高型が多いのが特徴である。5拍名詞の「海坊主、赤とんぼ、鬼が島」などの頭高型の語が観察される。東京方言では早くに頭高型が姿を消したこれらの語について、東京方言の伝統的な古いアクセントの保持を保っていることが明らかにされた点が注目される。

形容詞では、3拍形容詞は神奈川県内で地域差があり、小田原市方言や横須賀市東部方言では平板型と中高型の対立が保たれている。寒川町方言や三浦市方言では、第1類が平板型から中高型への変化の過渡期にあり、平板型と中高型の二つの型が認められる。二宮町方言では中高型一種類へと統合している。三浦市方言では形容詞の終止形は中高型に統合して、新しい変化を遂げている。

次に神奈川県内で地域差について、名詞・動詞のアクセントでは、三浦市方言が5地点の中で最も古いアクセントの型を保っている。それに対して横須賀市東部方言では、東京方言と同様の新しい相が観察される。

地名は地域の言語生活に密着した固有名詞として、その地域のアクセントを保つ傾向がある。例えば、小田原市方言では尾高型のアクセントの地名「オーヤマ（大山）」「オダーラ（小田原）」「江ノ島」「鎌倉」などが多く観察され、二宮町方言では、アズマシタ（吾妻下）、オキツクダ（沖築田）などの多拍語において平板型のアクセントが多く観察された。また、河川名でも地元に近いければ平板型、その地から離れると東京と同じ起伏型のアクセントになる。例えば、小田原市方言では、市内に近い川は、サカーカ[°]ー（酒匂川）、早川川ハヤカーカ[°]ーと平板型であ

るが、寒川町方言では起伏型に発音される。反対に寒川方言では相模川は、サカ°ミカ°ーと平板型で発音し、小田原方言では、サカ°ミ]カ°ーと東京と同じ起伏型に発音する。このような地名に関する報告は今までになく、貴重な研究である。

本研究は、神奈川県内の南部方言のアクセントを丹念に調査し、神奈川県内が横浜市方言のように首都圏方言と同じ変化を遂げている方言と、旧相模国に属する足柄方言、愛甲南部方言、高座、三浦方言のように伝統的神奈川県方言の特徴を残している方言の差を明らかにしている。神奈川県方言は東京式アクセントと同じ体系であるが、型の相、型に所属する語例について語的な異動がある。その詳細な実態を記述により県内の方言差が明らかになっている。従来、ほとんど報告がみられなかった全県に渡る記述調査が報告された点は貴重である。さらに、本論文では動詞、形容詞の活用形アクセントに注目した結果、活用形のアクセントによって神奈川県内の地域差が明らかにされた点も優れている。

ただ、調査資料を収集整理するに際して、アクセント系統の記述と、アクセントの語的なバリエーションの興味深い語例の記述と、東京アクセントの比較とが考察に紛れ込み、記述のレベルに分かりにくさがある点が気になる。また、アクセント調査の対象が高年層に限られているため、神奈川県の方言区域毎の年代差によるアクセント体系の変化が明らかにされていない点が惜しまれる。神奈川県方言の研究から東京アクセントの古層を解明しようとするならば、比較研究を行うに際して県内各方言区画のアクセント体系の年代差の詳細な記述が必要である。今後、伝統方

言の話し手が健在なうちにアクセントだけでなく、音韻、文法、語彙の詳細な記述が望まれる。また「北部方言」の調査も必要である。

今後、考察を深めるべき点があるが、本研究は神奈川県という東京に隣接し東京に類似するアクセント地域の詳細な調査研究を行っている。これらの記述は、今後、山梨、群馬、埼玉、千葉などの関東方言全体のアクセント体系解明につながる。また、現代日本語方言の基礎となっている首都圏方言アクセントの解明に大きく寄与する、基礎的な重要な研究であることから、坂本薫氏の「神奈川県方言アクセントの記述的研究」は博士（文学）の学位を授けるに相応しい論文と認める。

平成 30 年 12 月 25 日

主査	國學院大學教授	久野マリ子	㊟
副査	國學院大學教授	小田勝	㊟
副査	國學院大學教授	吉田永弘	㊟
副査	神田外語大学大学院教授 國學院大學大学院兼任講師	木川行央	㊟

坂本 薫 学力確認の結果の要旨

下記4名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成30年12月25日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	久野マリ子	㊟
副査	國學院大學教授	小田 勝	㊟
副査	國學院大學教授	吉田永弘	㊟
副査	神田外語大学大学院教授 國學院大學大学院兼任講師	木川行央	㊟